

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 19 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520072

研究課題名（和文） 日本ナショナリズムと戦後思想－戦争の記憶・表象に関する
比較思想史的研究研究課題名（英文） Japan's Nationalism and Post WWII thought - research concerning
recollection・symbol of War in comparative history of ideas.

研究代表者

樋口 浩造 (HIGUCHI KOUZOU)

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：30243140

研究成果の概要（和文）：持続的な、戦争記念館の調査によって、中国国内のかなりの戦争記念館を調査することができた。また頂点思想家にかかわる成果として、単著をまとめ、また共著を出版した。さらに戦争の記憶に関して、中国での国際シンポジウムや講演活動を行うことができた。ただし、こうしたフィールド調査と、頂点思想史の交差点を明らかにする、当初のもくろみは、いまだ未完成である。

研究成果の概要（英文）：A lot of the Memorial in China have been investigated by sustainable research. Also I completed a book and published a joint work as the result of top-tinker's Research. Furthermore, International Symposium and lecture have been held in China about the memory of war. The original plan that crossing of history ideas would be clarified by field research is still developing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：ナショナリズム、戦争の記憶、東洋、日本思想史

1. 研究開始当初の背景

以前から、江戸の自国意識と近代ナショナリズムを比較検討する視点から、ナショナリズムについて考察してきた。江戸思想史研究の成果を踏まえ、戦争の記憶に関する、ナシ

ョナルな記憶の問題を、今後全面的に展開してみたいと思うようになった。またテキスト論に終始しがちな日本思想史研究に、フィールドワークとの結合という新しい方法論的な取り組みを持ち込むことを考えた。

比較思想史的研究の有効性を十分に発揮しながら、江戸期の自国意識から近代ナショナリズムへの歴史的に厚みのある理解や、理論的なナショナリズム研究の成果を、戦後日本のナショナリズム問題を理解する基本的な前提としながら、本研究を新たな戦後ナショナリズム研究として立ち上げていくことにした。

2. 研究の目的

本研究は、日本ナショナリズムの問題を、戦後日本の思想史上の問題として、戦後民主主義の質を問うような視座から考察しようとするものである。そのためには、大きく三つの柱が本研究を構成する。

(1) 研究が緒についたばかりの戦後思想史研究という領域の中で、戦後思想の中心的役割を果たしてきた丸山真男をはじめとする代表的思想家の思想的テキストを、平和思想とナショナリズムとの相関関係という視点から分析していく。

(2) 各地に作られた戦争記念碑や記念館・博物館を調査し、人々に受容される戦争の記憶のされ方を検討していく。平和国家日本をめぐる知識人の発言と、おそらくそれらとは大きな落差をともしないながら作られていく戦争記念館の思想を、そのどちらもが戦後日本のナショナリズムの形成に参与してきたとする見通しのもと考察を加えていく。これは方法的には、頂点思想家のテキスト分析と、フィールドワークによる草の根の思想分析との交差点を探るといふ、思想史研究としてはこれまでにない試みとなるはずである。

(3) 本研究は戦争の記憶・表象をめぐる東アジアの比較思想史的視点をできる限り取り入れながら行っていく。中国、韓国、台湾での戦争の記憶のされ方はそれぞれにねじれを持っており、冷戦体制やそれ以後の国際情勢を反映した内容を持っている。ナショナリズムが単に対内的に形成されるものではなく、また対外的な対抗関係から形成されるだけでなく、同時並行的にまた世界的な冷戦体制の枠組やその崩壊後という状況の中で作られていくことを、戦争の記憶のされ方、戦争博物館の建設を題材に、比較思想史的な考察を加えたい。日本におけるいわゆる特殊「靖国」問題を、東アジアに共通する問題として、開かれた議論の俎上にのせる可能性を

探っていく。

本研究の目的の第一は、ナショナリズムの中でも、いわゆる「健全」と称されるナショナリズムについて考察を加えようとする点にある。幕末以来の中央集権国家を建設しようとするナショナリズムは、従来「健全」なるものとして議論され、それが「排外的」で「超国家主義的」なものに変質したとする通説的理解があるように思われる。しかし本研究は、こうした立場をとらない。「健全な」ナショナリズムの我々意識のうちにこそ、現在を含む戦後社会の問題が胚胎していると考えからである。戦後の社会の在り方を根底から問い直すような視線を獲得するためには、戦後民主主義を支えてきた「健全な」ナショナリズムへの問いが不可欠であるとする認識に本研究は支えられているし、これがこの研究の目的でもある。手放しで迎えられた戦後民主主義自体の功罪を冷静に分析すべき時期に来ているのではないだろうか。こうした立場にたつて、戦後知識人の発言をあらためて分析していく。また、こうした立場に立つことを通じて、歴史修正主義との真の対決も可能になるものと考えている。

また本研究は、ナショナリズムを戦没者祭祀や戦争の記憶の問題として考察することをもう一つの目的としている。東アジアの戦争記念館、博物館の錯綜する歴史表象と国内の遊就館をはじめとする諸施設の展示表象とを比較検討することも合わせて行いながら、それぞれの国家・地域が戦争の記憶・表象を通じてどのように国民形成を行っているのかを検証し、戦後民主主義体制のもとの日本ナショナリズムの特色を浮かび上がらせたい。それは同時に、東アジアにおける日本の国民形成の特徴を考察することでもある。こうした研究を通じて、日本の戦後民主主義の質を問い直すことが、本研究の目的である。

また方法的な取り組みとして、頂点思想家のテキスト分析と、社会的に流布する戦争の記憶との交差点あるいは落差を探ることも本研究の目的のひとつである。アカデミズムの生み出す平和思想やナショナリズムの主張の検討はもちろん重要であるが、人々のあいだに流布されていく戦争記念館や記念碑の思想が置き去りにされてはならないと考える。この両者を同時並行的に分析していく

ことで、時代思潮をより広い視野から捉える方法的な模索を行うこともまた本研究の目的である。

3. 研究の方法

取り上げる頂点思想家としては、「健全な」ナショナリストの代表として、丸山真男と石母田正をモデル的に考えている。丸山の持つ国民形成に向けたナショナルな発言は、戦後民主主義を形成する一翼を担ってきた講座派のナショナリズムとどう関連し、どうズレているのか、両者のナショナリズムの特色を考えていきたい。また同時に、アジア主義者と言われ、また、民族主義者とも見なされる竹内好のナショナリズムと、一国主義的、国民主義的と言われる石母田や丸山のナショナリズムを比較検討していく。東京裁判に、組織的近代的な軍の関与を嗅ぎ取る竹内と、そこに非合理主義的な軍国主義の精神形態を見る丸山とは一見両極にある知性であるが、むしろこの両者には、近似性あるいは相補性が存在するのではないかという見通しのもとテキスト分析を行っていく。戦後の思想や国民的コンセンサスが「健全な」ナショナリズムの言説を通じて、いかに形成されてきたのかを明らかにし、その問題性を議論する論点を提示していきたい。

戦没者祭祀の問題は、それぞれの国家が抱える問題であり、また国民意識の形成の問題として、東アジアに共通する問題でもある。東アジアに共通する戦没者祭祀の問題として考える視角から、戦争博物館の展示表象との比較考察を行い、日本における国民形成のコンセンサスをめぐる思想的位置を明らかにしていく。例えば、首相が靖国神社に参拝することは、国内国外を問わず議論的となるのに、首相が広島平和記念式典に参列することは、なぜ保革共に賛同するものとなるのか、戦争博物館の展示や戦争の記憶のされ方を、国民的合意の調達という観点から明らかにしていく。

国内の戦争記念碑や戦争博物館の調査分析を通じて、そこで形成されようとする戦争の記憶の在り方と、思想家が構成する戦後日本のあるべき姿との関係、あるいは落差を目に見えるものとするのがひとつの課題となる。それはアカデミズムが構成するナショナリズムと、人々に受容されるナショナリズムとの

あいだがどのように関係し合い、そしてねじれながら、日本のナショナリズムが国民的合意を形成してきたのかを明らかにしようとするものである。日本ナショナリズムの上からの形成と下からの形成の思想史的問題の所在を明らかにしていく作業は、戦後の枠組みそのものの問い返しの作業であり、ナショナリズムへの批判的・反省的視座を持たない戦後理解の危険性を明らかにしていくものとなるであろう。まず、「健全な」ナショナリズムと見なされてきたものを、反省的に見直そうとする着眼点に、本研究の新しさや希少性が存すると考えている。こうした着眼点に基づいての、代表的思想家の言説分析は、戦後の言論界が深くまた広くナショナリスティックな視線に囚われてきたことを明らかにする点で画期性を持つものと考えられる。また、民主主義とナショナリズムの相関性に着目する研究は、今後ますます盛んになるであろう戦後思想史研究のひとつの型を提示することになるのではないだろうか。

次に、テキスト論に終始しがちな思想史研究に、博物館、戦争記念館の展示表象の議論や、戦争記念碑の問題を取り込むことは、新たな思想史研究の可能性を探る試みとなるはずである。歴史学をはじめとした諸分野で盛んな、表象文化論的な研究方法を、思想史研究に積極的に取り込むことで、現在進行形の議論に思想史の側から介入していくことを目指すものである。それは、テキスト分析とフィールドワークを、また、テキスト分析とその社会的コンテキストとを切り結ぶ方法の模索である。始まったばかりの戦後思想史研究を、テキストの外部に開く、新しい方法論的な提案となるはずである。

ナショナリズムは、国家や国民の独自性の自覚に基づくものであるからこそ、かえって、そのことを客観化するためにも、比較思想的な研究が必要ではないだろうか。戦争博物館や、記念碑は東アジアの各地に建設されており、ナショナリズムを考察する上でかっこうの素材である。その比較思想的考察は、東アジアのナショナリズムとの交差の中で、日本ナショナリズムの特徴を明らかにすることになるであろう。閉塞することのない、アジアに開かれたナショナリズム研究としての意義があるものと考えられる。

4. 研究成果

持続的な、戦争記念館の調査によって、中国国内のかなりの戦争記念館を調査することができた。また頂点思想家にかかわる成果として、単著をまとめ、また共著も出版した。さらに戦争の記憶に関して、中国での国際シンポジウムや講演活動を行うことができた。ただし、こうしたフィールド調査と、頂点思想史の交差点を明らかにする、当初のもくろみは、いまだ未完成である。また、台湾や韓国の記念館との比較検討を行う予定であったが、一人ではカバーしきれず、中国中心のフィールドワークとならざるを得なかった。

ナショナリズムや記憶に関する理論的な考察が主な成果であり、具体的な戦争記念館に関するものは、基礎的な調査の成果としての、美濃の英霊人形に関する資料だけとなった。基礎的な調査は厚みを持って蓄積されてきており、今後活字化していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 樋口浩造、史料紹介：小倉山善光寺所蔵『日露戦役野戦第九師團戦歴』解説及び注記、愛知県立大学文学部論集日本文化学科編、11号、査読無、pp. 107-167.

[学会発表] (計2件)

- ① 樋口浩造、「平和国家日本」という語りー「ヒロシマ」「平和憲法」の集合的記憶、国際シンポ「南京をめぐる記憶の場」、2010年8月13日、南京大学.
- ② 樋口浩造、日本における靖国神社問題、講演会、2010年9月13日、四川師範大学.

[図書] (計3件)

- ① 樋口浩造、江戸の批判的系譜学ーナショナリズムの思想史、ペリかん社 pp. 225、2009年.
- ② 子安直邦、日本思想史の30冊、人文書院、6冊分計36頁、2011年.
- ③ 上川通夫、国境の歴史文化、清文堂、pp. 69~92、2012年.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 浩造 (HIGUCHI KOUZOU)

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：30243140